11月15日　年間第33主日　マタイ25章14～30節　いちばんお金を大切にした人は？

先週、今週、そして来週の三回の日曜日は終末主日と呼ばれ、世の終わりについての教えとなっています。今日の福音もその趣旨によるものですが、わたしたちの生き方を教えている内容でもあります。

今日の福音もたとえ話です。「タラントンのたとえ」と言われるもので、同じ内容のものがルカでは「ムナのたとえ」となっています。そちらでは同じ 1 ムナずつが預けられますが、マタイでは預けられる金額が異なります。人々に神から与えられたものの値打ちは同じなので、ルカの福音のほうがしっくりくるように思いますが、使用人にもベテランやまだ働き始めた人などの経験に違いがあるので「能力に応じて」預ける額が変わるのは現実の社会のあり方を表しているのかもしれません。

いずれにしてもこれらのたとえのポイントは「預けられたものをどうしたか」にあるということです。今日のたとえの１デナリオン預かったしもべはお金を土の中に埋めて隠しておきました。それで増やすことができずに叱られてしまったわけです。しかし、そのお金は主人のものであり、もらったものではありません。当然それで商売をしても失敗して失うリスクがあります。主人が言うように銀行に預けても銀行がつぶれたら失われてしまいます。現代だったら不正アクセスによって横取りされることもありえますね。ですから、これらの人々の中でだれが主人のお金を大切にしたかというと、この土の中に埋めた人だということになります。ほかの人たちは預かったお金を増やしたのでほめられましたが、もし商売で失敗してすべてを失ってしまったら主人はどうしたでしょうか。

わたしはそれでも主人はほめたと思います。主人がお金を預けたのはそれを使ってほしかったからです。お金を使うことによって人とのかかわりが生まれます。よい品物なら喜んでもらえますし、あいさつや対話が始まります。銀行に預けるにしても窓口でのやりとりがあります。しかし、土に埋めた場合はだれともかかわることがないのです。

わたしたちがだれかにプレゼントしたとき、お金であっても品物であってもそのまま使わずにしまっておかれたら悲しいですね。使ってもらうために贈っているわけですから。今日のたとえ話の主人はお金をプレゼントしたわけではありませんが、それで儲けたとしても失敗したとしても、それで経験を積み、人とのふれあいを持つことを期待して預けたことでしょう。

わたしたちも主人である神からこの世のいのちを預かっています。それを大切にしようとするあまり、社会との接触を断ち、できるだけ人とかかわらずに生活しようと考えることもあります。人とかかわることは罪を犯すきっかけになるからです。しかし、人とのかかわりは罪や憎しみにまさる愛を体験する機会を与えてくれます。わたしたちは、神から預かったタラントンをどのように使うことができるでしょうか。　　（柳本神父）